

特集

挑戦



人生には、何かに挑戦するタイミングが訪れます。
長崎大学は、学生が多くのごことに挑戦できるよう、
さまざまな仕組みやチャンスを用意しています。
一方、学生たちもそれに応えて多くのチャレンジを試みます。
今回の特集では、今まさに挑戦し続けている2人の副学長の対談と、
これから羽ばたこうとする学生たちのインタビューを行いました。
人はなぜ挑戦をするのか。
それにはどのような意味があるのか。
その解を探ってみましょう。

対談

赤石孝次 副学長

Takatsugu AKASHI

長大生が起業家に!? 課題解決トレーニング

——大学における挑戦というさまざまな形がありますが、まず、学生が大学時代に挑戦する意義とは何でしょうか。

赤石副学長（以下・赤石）／私は、挑戦とは人間性をどれだけ磨けるか、そのための手段だと考えています。磨き方次第で自分の器も大きくなります。交友関係でもずいぶん変わりますね。皆さんも聞いたことがあるかもしれませんが、鹿児島に昔から「薩摩の教え 男の順序」といわれるものがあります。近年は、人間の評価基準として経済界でもよく引用されています。その順序とは……

- 一、何かに挑戦し、成功した者
- 二、何かに挑戦し、失敗した者
- 三、自ら挑戦しなかったが、挑戦した人の手助けをした者
- 四、何もしなかった者
- 五、何もせずに批判だけしている者

これを見ると、挑戦の重要性とともに、たとえ失敗しても挑戦することに意義があることが分かります。失敗してもいいんで

たら、とゴールだけ示す。本人は苦しみがらなにかたどり着く。できたら褒めて、じゃあ次はここまでやってみて、と少し先の目標を設定する。そこまで行くとなた褒める。そうしているうちに加速度がついてきてグリーンと伸びる。おそらく自信がつくでしょう。

赤石／「やる気スイッチ」がどこにあるのか、個人個人で違うので、その難しさはありますが、課題設定をして、やらせてみて、できたら褒めて……。

小林・赤石／（同時に）小さな達成感の積み重ね！

小林／ああ、気が合いますね（笑）

赤石／そう、それで昨年から非常に面白いプロジェクトが始動しました。「アントレプレナー育成事業」といいます。

小林／学内の会議でよく聞いています。学生から起業家を育てる事業ですよね。新聞報道も注目されています。

赤石／学部横断で学年横断、つまり長崎大学の学生ならば誰でも手を挙げて参加できる二年前のプロジェクトです。起業家によるコディネートの下、地元企業とチームを組んで大学が提供する資金と知識を用いながら、新しい事業を創出します。最終的には自分で起業することも夢ではない。これも、いうなれば小さな達成感の積み重ね

すよ。失敗から学べることは山ほどあるのだから。しかし、今の若い世代を見ていると、四と五が多いですね。指示されれば動くけれど、自分からは動かない。やる気のある学生に対して横から「あいつは意識高い系」と揶揄する。

小林副学長（以下・小林）／そうですね。でも現実には、大学に入学したての頃は皆さんおとなしいですね。正しいと思う答えを持っていないと手を挙げない。失敗を恐れてしまいます。日本の学校ではずっとそのように教育され、それに慣れ親しんできたのだから仕方ありません。私が所属する

工学部工学科の情報工学コースの学生に、どうしてここに来たのかと聞けば「今はITがいらしいと親や学校の先生が言うから」と。大きな野望や動機がある学生は少ないです。

赤石／経済学部でも、はっきりとした目的意識を持って来た学生はあまりいませんね。

小林／とはいえ、長崎大学に入る学生はポテンシャルが高いですから、数年目にはグッと伸びてくる。私のやり方では、目標を設定させるけれど、そこまでのたどり着き方は一切言わない。まずここまでやってみ



で自信をつけていく仕組みなのです。

小林／開始して六カ月。どうですか、学生の様子は。

赤石／今回は五島市の協力を得て始めました。数人でグループになり、そこに起業家や銀行の方にアドバイザーとして入っていただき、課題探しから始まります。軽い気持ちで手を挙げた学生が多く、最初の二カ月はほとんど動かなかったですね。ところが三カ月目くらいから学生の目の色が変わってきました。コディネーターの方から「現場も知らないで、ネットで情報収集して頭の中であれこれ考えても何もなら

ないよ」とさんざん言われる。それで現場に入って、日本全体の課題や五島特有の課題に気付き始めました。そうすることで自分ごととして意識に落とし込むことができ始め、ようやく地に足が着いてきました。小林／現場に出るとがぜん面白くなるし、見えてくるものがあるのでしょうか。

赤石／先日、出資評価会議があったのですが、発表が終わると感極まって泣き出す学生もいました。おそらくそこまで自分を出し切って資金を得た実感があったのでしょう。銀行や起業家の方も評価してくださりました。今後、自分たちで作ったプランに

2人の副学長が語る 長崎大学の〈挑戦〉

今回の特集のテーマは「挑戦」。長崎大学における挑戦とはどのようなものでしょう。学生担当副学長である赤石孝次教授と、情報担当副学長として2020年度新設予定の「情報データ科学部（仮称）」の準備を進める小林透教授にお話を伺いました。

小林透 副学長

Toru KOBAYASHI





Toru KOBAYASHI

沿ってお金を使い実証実験をしていくわけですから、さらにプレッシャーは高まります。例えば「若者を五島に呼ぶ」というテーマで実証実験してみると、実際に動いたのは若者ではなかったとしたら、またプランを練り直して確度を上げていく必要があります。

小林／工学部にも、地域の課題を自分たちで見つけて解決方法を考える創成プロジェクトというものがあ、単位も与えていきます。やってみるといろいろな気づきがあったて面白いと学生は言いますね。

赤石／経済学部にも長崎県内の企業や団体と学生グループが共同で課題解決を目指すPBL(Problem-based learning：課題解決型学習)という専門ゼミがあるなど、各学部で地域と接点を持った取り組みがあります。また、長崎大学独自の地域ボランティア活動と学生をつなぐ「やってみーでスク」もあります。このような活動に参加する学生は、二年生が多いのですが、それには大きな意味があります。課題解決のために駆けずり回る中で「これが分かったら、自分なりに解決策が提示できるの」、「もっとこういう知識が欲しい」と

のある人材を育成できます。

赤石／最近長崎では「職がない」とか「流出人口が日本一」とか、悲観的な情報に踊らされて後ろ向きな言い方をする人が多いでしょう。「〇〇がダメだから」というのは他人任せですよ。価値を創造するという面を考えれば、長崎は先進県。何しろいろいろな課題が集約されているし、国連の持続可能な開発目標(SDGs：Sustainable Development Goals)の十七項目のうち十三項目が身近にあります。

小林／これから世界が向き合うことになる課題が身近にたくさんある。つまり、実証実験に向いている環境を持つ地域ということです。このような学部は、仕事がたくさんある東京につくっても意味がありません。長崎だからこそ、仕事をつくる必然性があります。

赤石／そう考えると、挑戦に最も向いている地域であり、チャンスなのですね。長崎大学ならではの挑戦であり、学生の頃から社会の課題になじんで現場の空気を肌で感じる経験は、社会人になってから役立ちます。そう考えると、アントレプレナー育成事業と新学部は全く別物ではなくて、両輪

Takatsugu AKASHI



新しい コンセプトの 学部新設に挑戦します

自分の専門性を深めたいという要求が自然と高まってくるのです。親や先生に言われるままに入学して座学だけで学んで「なんでこんな勉強をしなくちゃいけないんだ」と不満に思うより、実体験で納得して「この問題の解決のためにはこれが基礎として必要で、そのための学びなんだ」と気付くことで、上の学年に進むに当たって専門的な知識の獲得に積極的になります。

長崎大学の新たな挑戦は 価値を創造する新学部

小林先生が中心になって進めている新しい「情報データ科学部(仮称)」は、全国でも例のないコンセプトの学部と聞いています。長崎大学の新しい挑戦といえますね。小林／先ほど課題解決の話が出ましたが、エンジニアリングの世界でいえばITを使って会社が抱える課題や問題を解決する、いわゆるソリューションビジネスで活躍できるシステムエンジニアを育てるのがこれまでのやり方でした。したがって、企業が集中する大都市でしか働けません。し

の取り組みといえます。

大学時代ならではの 貴重な経験が糧に

赤石／そもそも大学は中立で、外から入ってきてやすいし、意外なシーズ(種)が拾えます。今後、学内外の交流の場ができればいいですね。特に長崎大学は九学部から成る総合大学で、間もなく十学部となり、あらゆる分野の専門家がいます。

小林／そのとおりですね。私は大学における教員の役割は非常に大きいと考えています。企業との共同研究や地域で何か仕掛けるにしても、「あの先生はこの世界ではトップクラスだ」、「これに関してはあの先生に相談しよう」と周りから求められる研究者を大学がどれだけ抱えているかが鍵になってきます。実は、今回の新学部立ち上げを機に、全国から新しい教員も多く呼び寄せます。しかも、自身の研究領域の中でしっかり自分の足で歩き、自分の言葉で語れる優秀な研究者に声を掛けました。彼らが長崎に来て学生に接する、そこに長崎の

かしこの新しい学部では、それに加えて、データサイエンスを通じて新しい価値を創造できる人間を育てたいと考えています。データサイエンスとは、世の中にあふれている膨大なデータから必要な情報を取り出して世の中のために生かす学問です。データをうまく扱い、かつ課題を解決するという二つのことができれば、新しい価値を創造する人間になり得るのではないかと。そのような学部は今、日本にはありません。それを長崎大学に作るという意味では、確かに大きなチャレンジです。

赤石／すると、新しいビジネスの創設にもつながりますね。

小林／はい。例えば、長崎大学の場合は熱帯医学研究所や原爆後障害医療研究所が全国的にも存在感を放っています。同時に膨大なデータが蓄積されています。これらを解析することで、エンジニアとして医療に貢献できます。また、長崎の主要産業の一つは観光ですが、そのデータはこれまであまり生かされていません。正しく読み解くことで、混沌とした観光産業の中で新たな方向性やビジネスチャンスを見いだせるはず。実在のデータを教材に、実践力

企業が加わって何かが生まれる。空気中で雨や雪が生まれるには、核になる小さな粒が必要といわれますが、教員はその粒の役割を担うのではないのでしょうか。

赤石／それは楽しみです。最近気付いたのですが、学生主体のプロジェクトでは、それまで利害関係にあった同業者や企業の方々が、自然に手を差し伸べてくれるのです。「しょうがないな、こほ、こうなんだよ」と。社会人の方々には本音が下がります。休日のたびに学生へアドバイスするために県外から駆け付けてくれる方もいます。

小林／助けてあげたい、教えてあげたいと思うのが人間の本性です。そもそも学生は助けてあげたくなる対象ですから、周りの人々からの恩恵を受けることができます。それだけ大学時代の数年間というのは、人生の中でも特別な時間といえます。何もしないでいたら過すのは非常にもったいないですよ。

赤石／長崎大学はそのような場を積極的につくり、素晴らしい人材を輩出しています。高校生の皆さんには「あなたが主役ですよ、ここに飛び込んで面白いことをしてみませんか」と伝えたいですね。



アントレプレナー育成事業の出資評価会議の様子。企画発表をする学生も、それを評価するアドバイザーの方々も真剣勝負。



長崎大学独自の、地域でのボランティアと学生をつなぐシステム「やってみーでスク」を通して、子ども支援施設でバルーンを制作する学生たち。

長崎は課題解決先進県。 もつとも挑戦に 向いています

赤石孝次 副学長

学生担当副学長(経済学部教授。福岡県出身。九州大学経済学研究科財政学博士課程修了。経済学博士取得。一九九一年より長崎大学に兼任。二〇一七年より現職。専門は財政学、金融論(租税論)。やってみーでスク・テスク長兼任。

小林 透 副学長

情報担当副学長(工学研究科教授。宮城県仙台市出身。東北大学大学院工学研究科修了。電気通信大学で博士(工学)取得。二十七年間NTT研究所に勤務(うち三年半ドイツ駐在)。二〇一三年に長崎大学に兼任。二〇一七年より現職。専門は情報工学でIoTとAIを融合させたシステム開発技術。



若者の力で 新しい形の 平和学習を模索

片山桂維さん

教育学部小学校教育コース卒業

小学校の教員になる夢を追いかけ、愛媛県から長崎県へやって来た片山桂維さん。長崎でしかできない経験に挑戦しようと、被爆の実相や平和の大切さについて学び、発信する「青少年ピースボランティア」に参加。さらに、長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）サポーターの活動を始め、ナガサキ・ユース代表団の五期生にも選ばれます。

「高いようにも感じます。」「そうですね。でも僕にとっては、仲間と一緒に楽しみながら勉強し、視野を広げられる。例えるなら、同級生がサークルに行くのと同じ感覚で関わってききました。」

「ウィーン」の国連事務所で行われた、二〇二〇年核不拡散条約（NPT）再検討会議第一回準備委員会に参加しました。核兵器問題を身近に感じる機会になったと思います。」

平和関連のボランティア全体を通して、関わった被爆者の皆さんから「若い世代が頑張ってくれることがうれしい」と言葉掛けてもらい、励みになったと振り返る片山さん。とはいえ、平和というテーマは敷居が

「はい。長崎で充実した四年間を送ることができたのも、平和活動のような打ち込めるものがあったからです。卒業後は大学院で二年間学んだ後、愛媛県の小学校で教員になる道を選びました。愛媛の小学校の修学旅行は、平和学習を目的として長崎や広島へ行くケースが多いんです。僕なりに、子どもたちへ伝えられることがあると思っています。」

大学院では学級経営・授業実践開発コースへ。発展途上国でのボランティアや、バックパックを背負った旅にも挑戦してみたいです。



ウィーン日本人学校で平和出前講座を行った時の様子。ナガサキ・ユース代表団は長崎県、長崎市、長崎大学から成る「核兵器廃絶長崎連絡協議会」(PCU-NC)が主催する若者人材育成プロジェクトです。



日本で 夢をかなえたい 最先端研究に挑む！

アル・ヘレン・ムスタファ・コラクさん

工学研究科グリーンシステム創成科学専攻 博士課程五年



グリーンシステム創成科学専攻は、5年一貫制の博士課程。プログラムに魅力を感じ、長崎大学を留学先に選びました。

トルコ出身の留学生、アル・ヘレン・ムスタファ・コラクさんは、電気工学と情報工学という二つの異なる専門分野に精通。太陽光や風力といった再生可能エネルギーを活用した、効率的かつ安定的な電力の供給が期待される中、二つの専門分野を融合させることで、新たなエネルギー管理システムの構築を目指す研究に挑戦しています。日本語が堪能ですが、そもそも在籍するグリーンシステム創成科学専攻の入学条件に、日本語の能力は含まれていません。

「長崎に来た当初は『こんにちは』の意味も分かりませんでした。博士課程を修了したら、日本の企業で働きたいと思っています。夢をかなえるために大事なことは我慢。研究をしながら日本語の勉強するのは大変でしたが、諦めませんでした。日本語を理解できるようにになると、研究室の仲間たちとスムーズにコミュニケーションが取れるようになります。研究自体も楽しくなりました。」

「長崎に来た当初は『こんにちは』の意味も分かりませんでした。博士課程を修了したら、日本の企業で働きたいと思っています。夢をかなえるために大事なことは我慢。研究をしながら日本語の勉強するのは大変でしたが、諦めませんでした。日本語を理解できるようにになると、研究室の仲間たちとスムーズにコミュニケーションが取れるようになります。研究自体も楽しくなりました。」

「二年は本当にあつという間だと思っています。私は今まで常にチャレンジしてきました。これからも、研究、論文、就職活動のすべてに対して、一生懸命取り組んでいきたいです。」

日本の企業で経験を積み、将来的にはトルコと日本の懸け橋になるような会社をつくることも視野に入れているのだとか。エネルギー産業の未来を担うエンジニアとして、大きく羽ばたく日が待ち遠しいですね。



人生を変えたたった二人の 異国での挑戦

二石梨香さん

多文化社会学部社会動態コース卒業

国際交流基金アジアセンターが運営するプログラム「日本語パートナーズ」に応募し、約半年間インドネシア東ジャワ州のモジヨケルト県に滞在した二石梨香さん。二つの高校で、日本語教師のアシスタントを務めました。インドネシアを訪れたのは初めてだったのですか。

「はい。大学の夏に一月間、国際ワークキャンプに参加して、インドネシアの中学生と高校生を対象にエイズ防止に関する啓発活動をしました。派遣されたプロラ県は、電気や水道が止まるようなところ。親戚が多量に生活面でサポートしてくれるなど、歓迎してくれました。」

卒論はインドネシアの伝統的治療薬「ジャムウ」について研究。日常生活の中で、この薬がどのように使われているのか、現地調査を踏まえてまとめました。



二石さんが日本語パートナーズとして派遣された期間は、2017年9月から2018年4月まで。発音やイントネーションなど、ネイティブの立場から日本語の授業をサポートしました。

「現地では浴衣の着付けや茶道体験など、日本文化を伝える取り組みも行いました。日本に興味がある子どもたちはたくさんいますが、アニメが情報源になっているため、解釈に偏りがあります。正しい情報を伝えることができ、私自身も勉強になりました。」

卒業後はインドネシアにも事業所を持つメーカーに就職する二石さん。「エイズの啓発活動も日本語教育も、初めて挑む分野でした。大学生だから経験できた、挑戦だったと思います。今後は仕事を通じて、インドネシアの皆さんに恩返しをしたいです。」



柴田裕一郎教授の研究室に在籍。さまざまな場面でサポートしてくれる柴田教授や研究室の仲間たちとは家族のような付き合い。

農業高校から 水産学部へ 悪戦苦闘した四年間

畑田菜緒さん

水産学部海洋環境科学コース卒業

農業高校出身の畑田菜緒さんは、水産学部のAO入試を受験。合格後は「四年で卒業する！」という目標を立てて入学しました。

「自然や植物が大好きで、環境についても興味があり水産学部を選びましたが、普通科出身の同級生たちとの学力の差に悩ま

されました。

農業高校では、授業の半分が専門科目の勉強です。四年次からは水圏植物生態学研究室に所属し、海藻群落における栄養塩濃度の動態を卒業テーマに選び、研究に励み始めました。現地調査に加えて、海外の論文を読み解くといったさらなる努力が求められました。

勉強も部活も、いろいろなことに挑戦し、その中から自分に合うものを見つけてきました。時には恐れず、思い切ってシフトチェンジすることも大事だと思います。



「翻訳機を駆使したり先生に聞いたりして理解する作業が続きました。日本語に翻訳しても意味自体が分からない言葉もあり、とても苦労しました。先生や先輩方が根気よく教えてくださったおかげで、ゴールにたどり着くことができました。」

授業、テスト、卒論と真剣に取り組む中、リフレッシュになっていたのが二年次に入学した探検部の活動だったのだとか。

「南アルプスは特に思い出深い場所です。北岳や間ノ岳など、白根三山の峰々を縦走したのですが、標高三千メートルを超えると見える景色や植物が変わります。沖永良部島で五日間かけ



授業ノートと卒論作成時に参考にした大量の論文。夏には上五島に約3週間滞在。データ収集を目的として、昼夜問わず海での採水調査も行いました。

ていろいろな洞窟に入った体験にも感動しました。」

卒業後はアウトドア用品メーカーに就職し、新たな挑戦をスタートさせる畑田さん。大学の学びや経験を生かしつつ、環境保護の重要性や自然の素晴らしさを伝えていきたいと語りました。



創立46年となる探検部。登山、ラフティング、沢登り、洞窟内を探検するケイビングなど、自然をフィールドにさまざまな体験をする学内の部活動です。

挑戦する学生たち

小さな挑戦が発展 継続的な被災地支援に

伊藤大悟さん

環境科学部環境政策コース卒業

伊藤大悟さんは在学中、三つのボランティア活動に挑戦。一つ目は、浜や川で清掃活動をする「ながさき海援隊」。二つ目は、学生、長崎県、県内企業が協働し、人と人をつなぐ交流の場の創造を目指す「緑JOYプロジェクト」。そして三つ目が、最も心に残る取り組みになった、地震や豪雨災害に見舞われた被災地の支援活動です。

「友人の実家が被災し大変だと聞いて、力になりたいと思いました。結局、友人宅の被害は少なく、行かなくてもよくなったのですが、他にも困っている方はいるはずだと思いました。被災地に行ってみると、あまりの被害の大きさから、今後より多くのボランティアと継続的な支援が必要だと感じました。」

「ボランティア活動を通じて、さまざまな出会いと挑戦を経験した伊藤さん。」「やってみよう！と、後輩へエールを送りました。」



学内をはじめ、県内外の大学生にまで広がった支援の輪。夏休みには現地に長期滞在したことも。「関心を持ってくれるだけでうれしい」と被災者の声が届きました。

卒論では、地域の人たちが主体となり発電所を設立する動きに着目。フィールドワークを行った大分県竹田市でもたくさんの出会いに恵まれました。



尊敬する企業のトップに 自らアプローチ！

古閑健一郎さん

経済学部ファイナンスコース卒業

金融マンに憧れて経済学部に入學。三年次から地域経済学のゼミに所属し、県内企業や地元商店街をフィールドに、調査と研究を重ねました。そんな中、ある金融業界のスペシャリストの存在を知ります。著書を読み、本人に会ってみたいと思つた古閑さんは、思い立ったが吉日と、自らアプローチしたそうです。

「鎌倉投信という投資会社で、資産運用部長を務め、現在は株式会社amc代表取締役の新井和宏さんがその方です。東京で開かれるセミナーに参加し、名刺

の立場で、自分の理想とする企業を

育てていくことが、大きなミッションであり挑戦だと思つています。四年間を過ごした長崎では、たくさんの方に出会えました。いただいた名刺を数えてみたら、五百枚を超えていたんです。経営者の方々が語ってくださった苦悩や思いを、これらの社会人生活に生かしていきたいと思つています。

地域と企業が共に幸福になれる、そんな社会を育んでいきたい。古閑さんの挑戦は、まだまだ始まったばかりです。

ゼミ活動は、地域課題への意識を醸成するきっかけになりました。社会人になっても初心を忘れず、理想とする企業を育てていきたいと思つています。



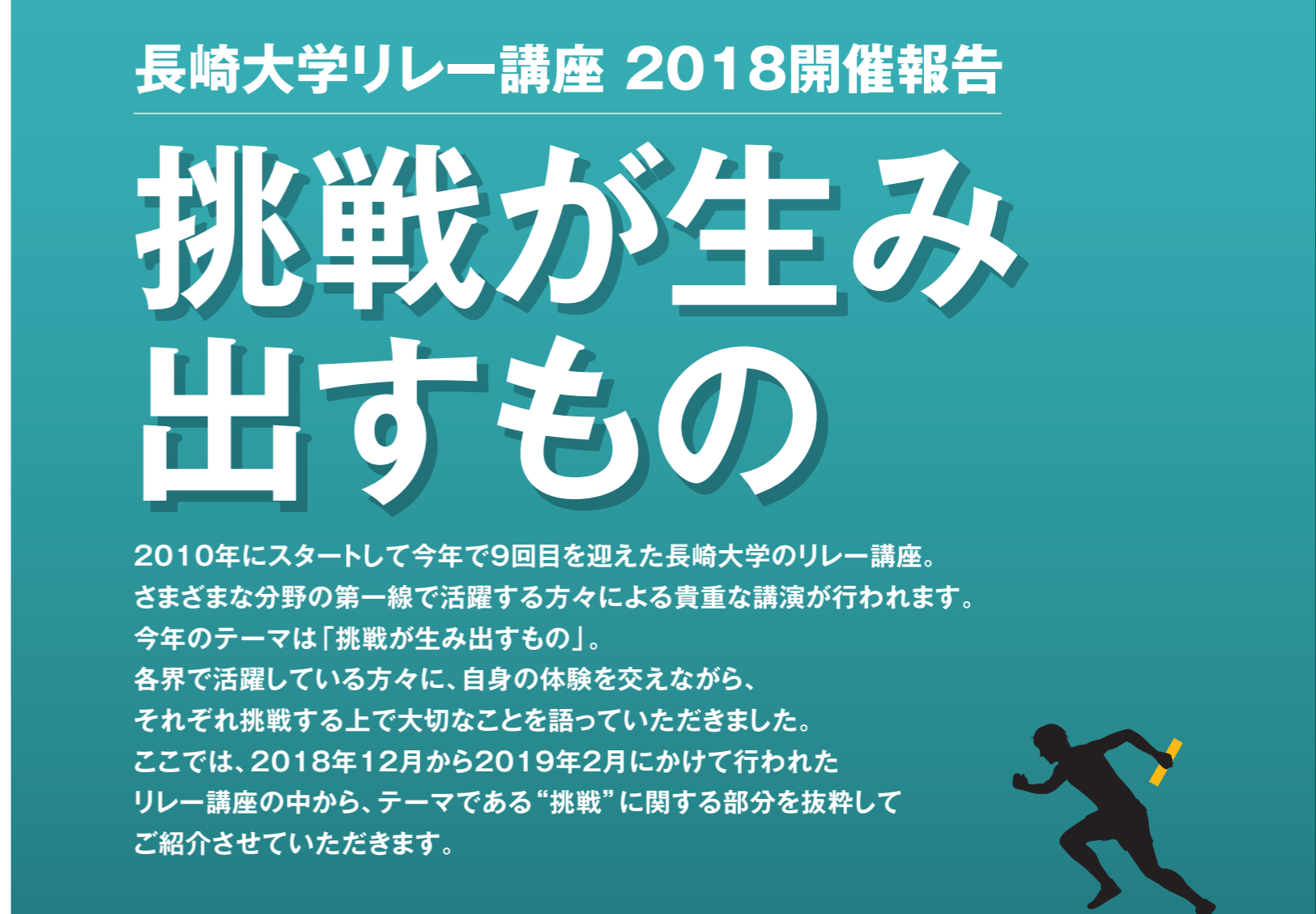
長崎の信用金庫が主催した講演会に参加。学生が就職する際に何を考えるのか、何を求めているのかについて会員企業の前で話しました。



長崎大学リレー講座 2018開催報告

挑戦が生み出すもの

2010年にスタートして今年で9回目を迎えた長崎大学のリレー講座。さまざまな分野の第一線で活躍する方々による貴重な講演が行われます。今年のテーマは「挑戦が生み出すもの」。各界で活躍している方々に、自身の体験を交えながら、それぞれ挑戦する上で大切なことを語っていただきました。ここでは、2018年12月から2019年2月にかけて行われたリレー講座の中から、テーマである“挑戦”に関する部分を抜粋してご紹介させていただきます。



Yoshiro OHSUMI

大隅良典

東京工業大学 栄誉教授
大隅基礎科学創成財団 理事長

オートファジーのメカニズム解明への寄与で2016年にノーベル生理学・医学賞を単独受賞。現在は東京工業大学にて研究を続けるとともに、大隅基礎科学創成財団の理事長として、日本の基礎科学の発展に努めている。講演では、ノーベル賞の受賞も含めた50年にわたる自身の研究を振り返り、どのような興味から研究を進めてきたのか、また次世代の若者に大切にしてほしいことについて語った。

素直な興味や疑問を出発点に 自分の道を進んでいく

オートファジーの研究について振り返ると、私は、がんやアルツハイマーの解決につながると最初から考えて研究していたわけではありません。このことは非常に重要で、純粋な知的好奇心に基づいた研究こそが、科学の発展においてとても大事だと思えます。そしてその原動力になる出発点を忘れずにいることが大切です。研究を進めてい

大切なのは 自分自身の 純粋な好奇心



ノーベル生理学・医学賞を受賞した研究の内容とともに、物事への取り組み方や諦めない姿勢について語った大隅教授。講演後の質問時間では一人ひとりに丁寧に答えていた

くと、時には大きな困難に直面することもありますが。そうした時に、自分の好奇心の原点に返ることができれば、何度でも挑戦することができま。好奇心を感じる分野は、人と違っても気にすることはありません。むしろ人と違う自分だけの道を進んだ先に、科学の新しい発展があります。私自身、昔から少し離れたところで研究するのが好きでした。ただ、決して孤独だったわけではありません。研究室のメンバーに支えられてノーベル賞を受賞することができましたし、世界中に同じ志を持つ仲間が得られるのも、研究をしていく楽しさの一つです。

科学的な見方や考え方で 遠くの未来を見据えた研究

私の若い頃と比べると、今は研究者に精神的なゆとりがないように感じます。成果を出さないといけないという切迫感で、目の前の研究を楽しめない空気がまん延しています。新しいことを始めると、大きなうねりになるまで時間がかかりま。特に基礎科学は先が見えづらく、大きな研究分野になるまで十年も二十年もかかります。しかし「あなたの研究はどう役に立つのですか」と早急に成果を求め過ぎるのは、研究に歪みを生み出すと思います。目先の利益ではなく、世界の五十年後、百年後の未来を考える。そんな長期的な視点で、今の社会には必要なのではないでしょうか。そして、専門家以外のたくさんの方も関心を持って、科学を人類共通の文化として楽しむ社会であってほしいと願っています。



谷田千里

株式会社タニタ
代表取締役社長

1972年大阪府生まれ。調理師や栄養士の免許を取得後、佐賀大学理工学部へ編入。卒業後は船井総合研究所を経て、2001年にタニタに入社。2005年にタニタアメリカ取締役、2007年タニタ取締役を歴任し、2008年より現職。講演では、タニタが挑戦し、現在も継続しているさまざまな取り組みを紹介するとともに、経営における自身の考え方や若者へのアドバイスなどを率直な言葉で分かりやすく話した。

健康寿命を伸ばして
医療費の適正化へ

就任当初、私は社長としての合格といえる最低ラインは売上と利益をキープすることだと思っていました。しかし、高齢化や医療費増加の影響で税率はどんどん高くなっています。そうした状況の中で社員の生活を考えると、キープだけでは不十分で、売上も利益もさらに上げる必要があります。そこで私は、合格点のハードル自体を下げることを考えました。医療費の増加につながる一番大きな問題は、健康寿命と平均寿命の乖離です。長生きできても、足腰が弱って寝たきりになってしまいます。そんな状況を変える商品やサービスが、かつて世界で初めて体内脂肪計を開発したタニタにはあります。「健康をはかる」から「健康をつくる」会社に変化させ、「日本を健康に」するという新しい目標を掲げて進むことにしました。

新しい取り組みに挑戦して
新たなマーケットを生み出す

目標達成のために、さまざまな挑戦をしてきました。まずはSNSを活用したタニタファンの獲得です。タニタを知ってもらい、若者にも興味を持ってもらいたい。そんな気持ちから、当時はまだ珍しかった動画配信を積極的に رفتたり、企業アカウントとしてツイッターを使った情報発信を行ったりしています。二つ目は、食のソリューションの提供。タニタ社員食堂のヘルシーメニューはもともと社員の健康管理が目的でしたが、今ではレシピー本やタニタ食堂、タニタカフェなど、一般向けのサービスとして広がっています。そして三つ目は、健康プラットフォームの構築です。グループ会社のタニタヘルスリンクが提供している集団健康づくりパッケージ「タニタ健康プログラム」を軸に、利用者のさまざまなデータを産官学で活用することで、国民の健康増進・健康寿命延伸につなげます。こうした新しい挑戦は全体最初に対処されますが、私は全く気にしません。新しいことを始める時には得てして反対されるものなので、むしろその方がマーケットがあるなど感じています。そしてこれからのタニタにとって必要なもの、頑固とは言わないまでも、反対されようと自分で考え、動ける人だと思っています。

「日本を健康に」
するための新しい挑戦

吉田照喜

ポストアンドポスト株式会社
代表取締役社長社会貢献と
ビジネスを両立する

1982年長崎県生まれ。早稲田大学商学部を卒業後、ミスミに入社。その後2007年よりソーシャルビジネスを支援するボーダレス・ジャパンに創業メンバーとして参画。以降、シェアハウス事業やハーブティー通販事業などを通じてさまざまな社会問題の解決に取り組み、現在はサイズが合わずに着られなくなった子ども服のリユースショップ「POST&POST」を展開中。さらなる事業拡大と問題解決を目指す。

社会問題解決のための
持続可能な取り組み

そもそもソーシャルビジネスとは何なのか。簡単に言うと、社会問題をビジネスで解決することです。利益を追求する資本主義の中で、社会的に見捨てられてしまう人がいる。そんな人たを救いたいという気持ちで活動しています。具体的な例としては、ミャンマーの薬タバコ農家の貧困・健康問題を解決するために、代わりの産業となるハーブの栽培環境の整備と、妊婦さんが安心して飲めるハーブティーの製品化を行いました。また、日本で外国人を受け入れる賃貸物件が少ない現状を変えるため、さまざまな国の人が暮らし、お互いに交流するシェアハウスを運営。これまでに四十八カ国で八千人が利用しています。こうした事業はすべて、ビジネスとして経済的に利益を得られる仕組みとなっています。社会問題の解決にボランティアで立ち向かうとなると、資金が不足して持続的な活動が難しい場合が多く、意義があっても活動が広がりません。きちんと持続可能な活動になることが大切です。

事業の成功まで根気強く
何度でも挑戦を繰り返す

ソーシャルビジネスのテーマを考える上では、何気ない生活の中での出会いを大事にしてほしいと思います。会話や情報、体験をいかに自分ごととして考えられるか。挑戦するテーマは日常にあふれています。また、日本においても限界集落やフードロスなど課題は山積しており、まさに「課題先進国」です。しかし、だからこそ、これから世界が直面する課題に一足先にトライすることができる。そして有効なアイデアを広めることで、世界に貢献できるのではないのでしょうか。テーマに向き合う上で重要なのは、とにかくやり切るかどうかです。社会問題は諦めた時点で誰かを救うことはできなくなります。簡単に解決するものでもありませんので、正解を見つけるまで何回でも試す。そんな気持ちでいいと思います。

白駒妃登美

博多の歴史
株式会社ことほぎ代表

幼い頃より歴史や伝記の本を読み、登場人物を友だちのように感じながら育つ。福沢諭吉に憧れて慶應義塾大学に進学。卒業後は国際線乗務員として勤務し、その後企業の接客研修講師、結婚コンサルタントとしても活躍。大病をきっかけに歴史上の偉人の生き方をひもとく中で、かつて日本人が紡いできた「今を受け入れ、この瞬間に最善を尽くし、天命に運ばれていく」という生き方にシフト。日本の歴史における「志」のリレーについて全国で講演している。

時代を超えて受け継がれる
誰かを想い努力する志

今日は歴史の中で挑戦する素晴らしさを示してくれた、先人たちのエピソードをご紹介します。彼は江戸時代に日本初の実測地図を作りましたが、その測量の旅に出発したのは、なんと五十五歳の頃でした。人生五十年といわれた時代、その年齢を超えた伊能忠敬は、江戸で自分よりはるかに若い第一人者に弟子入りして天文学を学び始めます。誰よりもひたむきに学び続ける姿勢が評価され、測量隊を率いて日本の地図を作る国家事業に携わることに。そして、東日本から西日本へと過酷な旅を続け、見事に日本全土の測量を完遂します。その正確さは、現代の技術で測った地図とほとんど誤差がないほど。ペリーをして「西洋とは異質の文化の中では世界最高峰」と言わしめます。後世の人々のために地図を残したいという伊能忠敬の思いは、見事に私たちに受け継がれています。夢というのは、自分のためにならざるもの。しかし、志は世のため人のため、自分を超えた存在のために頑張ること。だから志は時代を超えて受け継がれていくのです。

自分の人生を豊かにする
困難な状況で挑戦する心

もう一人は、吉田松陰です。西洋文化を知りたいと思った吉田松陰は、ペリー来航の際に米国への密航を企て、その罪で故郷の長州藩・萩にある野山獄に送られます。そこは二度と出られないといわれていた牢獄で、囚人たちも生きる希望を失っていました。しかし吉田松陰は、そこで猛烈勉強を始めます。一年二月の間に約六百冊の本を読んで学び、周りの囚人たちも巻き込んで、牢獄を学校のような場所にしてしまおうのです。明治維新の原動力となった人材を育てた松下村塾は、この時の経験が生かされたものです。与えられた環境で、今の自分にできる最高のことをする。そんな吉田松陰の生き方は、逆境こそ成長のチャンスだと教えてくれるのではないのでしょうか。

歴史が教えてくれる
挑戦の素晴らしさ